

糟屋郡表

鼠骨漬風土記

卷之九

和書門	二九〇七〇	二二九	二九
類	號	函	冊

和書	二九〇七〇	二九	七
類	號	冊	架
內閣文庫	七	函	大

番號	和 29070
冊數	29 (26)
函號	176 51



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

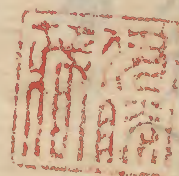
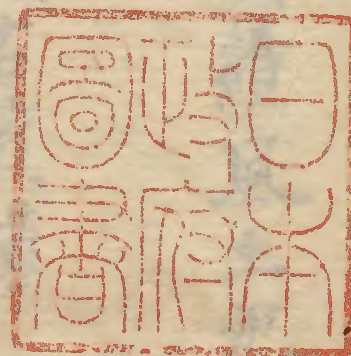
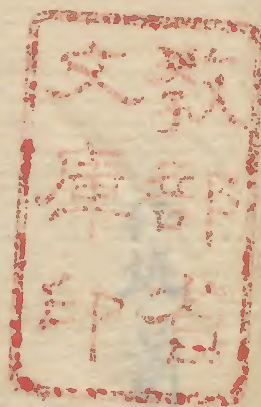
Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak







内一〇一八二號

古成  
月録

長古成  
古成  
古成

川山古成  
古成  
古成

元山古成  
古成  
古成

高島古成  
古成  
古成

上山田古成  
古成  
古成

各古成  
古成  
古成



竹坑前國續風土記卷之二十五

古城古戰場 目錄

表糟屋郡

多々良古戰場 陣之腰

古竹山古戰場 飯盛山古城

丸山古城 草場古城

高鳥居古城 長者原古戰場

上山田村古城 下山田村城跡

名嵩城跡



表糶屋郡

御飯山古城

和自古戰場

立花山古城

杉山古戰場

青柳町古城

團原古戰場

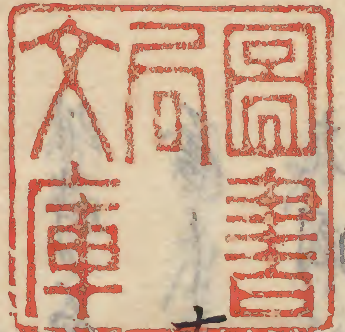
多々良古戰場

表糶屋郡

和自古戰場 目錄

表糶屋郡風土記卷之二十五

表糶屋郡風土記卷之二十五



古城古戰場

多々良古戰場

表糶屋郡

丙一〇一八二號

津屋村北西小有此邑の西も遠く浮有是城

多々良濱と云弘安に吳賊襲來類乃時

此浮小乱杭坂歩多要害を以て其後も和續

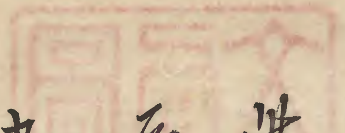
之乱杭坂捕て多々良賊の來ぬ一はか

其備りて之を此と記乱杭坂歩多記由

表糶屋郡今行殘多持て表糶屋者古里建武



三年二月將軍足利尊氏京都此軍小  
歩負て筑紫より中里筑前國多々良此湊  
より着て多々良より宗像大宮司是より屬し  
將軍次我飯小清より入多甚き故に尊氏の  
筑紫より威勢出来しハ備小大宮司より早屬  
せし其之朝敵も組せし事不義と云はれし  
此時兼北肥後守武重同掃部女武後ハ宮方  
屬し七京山在尊氏西國小趣し由を軍より  
九國此内也入立しと武後追て此より下は  
海上より鹿角より遠く此ハ豊前路張



程より肥後守大津山北乃開し遠く世方の  
所次筑前守を於此より筑後小次郎高き勢より歩衛  
國府より筑前より起し將軍の味方をすりと  
軍一筑後川の邊より小次郎高き勢より歩衛  
小次郎入道より捕獲せしより太宰府乃有智山の  
城より押寄し攻落しぬ此より北は筑前北  
倉大勢小次郎より尊氏討人せしより宗像の  
方一趣く將軍足利此由を破戦しの為是  
より北より北より宗像筑前より北より  
香推宮の側成杉山より取上り先陣ハ多々良



濱上張出り寄来家敵を待ッ菊比と又子  
作人我率一々濱北西に足進んで矢草狀  
一々家お軍の陣より一矢一筋と射出  
さ良仁本細川高上杉吉良石堂島山振連  
ふり莫入命を浪りお敵少り菊比も鷹野  
丹軍人々西北より取籠居先陣座り左  
小分進変化櫓の意して暮立く戦も様  
仁本西川吉良石堂進立先陣と足り先子  
小力と丹人お軍足先杉山状歩下り真例等  
の如し強出ら進一足一菊比の陣上至る下至

浦上吉備軍跡神等北者去俄に如を變り  
裏切して攻々此の菊比前後の敵陣防ぎ兼  
良度の遠平浮城并赤所引退き暫く人馬の甚  
次休む中より多し仕立りり菊比は從ひ  
牛馬を圍の勢は久きて、自營中より成る進は  
一ま川肥後より引返してきてこれ等を怪し  
りて筑後路より進んで引退は其氏多を良濱  
此合戦より歩勝仁本義長一色入道氏大將と  
し菊比追追の為不犯位之若き菊比  
の宗徒と稱せ於阿蘇大宮司惟真多々良



濱の合戦の日係り自負よりあつた肥後國小幡  
山よて自害は秋月信和より太宰府より  
落しつゝを敵之勢より取圍みしは是れは  
叶はば討まふなり城赤星も海子と有ぬ  
菊比金無勢も如く是れ一交も片くすゝて  
の奥より引籠り仁木義隆一色入道と同  
八城の城攻めより内川彦三郎と追れしは  
亦不帰傳す是より後九國二宮悉くお軍小  
随ひあり此時の合戦此事本  
平記十六卷不詳なり永祿十二歳五月十八日大  
友家と毛利家と此濱より合戦有共軍の子細

次尋ふも毛利元就筑前國室満此高橋温種  
と敵りしより安藝國周防長門石見の軍勢次  
僅し豊前國中津里筑前國小幡入すれを  
の内中と大友幕下此國士多しと云ふも中国の  
大勢は見固し一戦も及ばぬ城を出て筑後  
路さしつゝ引退る立花の城より為原掃部助  
田北民部と悪田并進士等城代よりして在りし  
招致入る立花の城を請取三人の城代と筑後  
丹波里掃部と是も城代よりして毛利家此吉川  
元春小早川隆景と立花此城代本陣をす



先手の諸將と香部多と良の邊迄引下り續死  
をり惣大将元就と豊前國小倉上滞留し  
高野筑前守と入り又始り高野筑前守陳の大友  
家の三將戸次丹後守澄連田村越中守澄連吉  
弘左近大友澄理を博多陣取足輕と多と良  
濱島出し一迫合有同十三日毛利の先子佐波  
熊谷上戸桂末永天野軍勢敗率し立花城  
攻下り將多松原上備後立足輕を葛津内を  
放火す大友勢も三方より勢を遣りて一目も  
四ヶ度の戦ひ有始の程と筑紫勢勝りし系

中国勢負色見之る処丹平斐源四郎  
末永源七市石黒控五郎宗近刑部左衛門完戸  
四喜左衛門桂内記三浦平太夫内友掃部助を始  
りし毛利家の名を討し一人當千の士  
芸松原と高野筑前守馬の是次一面も立並  
馬上の港を特まつ志分り小室菟り市原  
筑紫勢ありと急引して三方より命つる瀬川  
中小も桂内記と十六家此若茂忠成しり唯  
一勝味方を懸懸と逐り於敵を逐りし一向  
馳々海を大友勢北中より七八騎引送り終り



桂枝折取多り彰多日之也言一々中必勢  
特多哉引々香椎の山より上りたる同月十日  
吉川駿河守元基小早川左衛門佐隆宗立花山次  
下於兼々より香椎左陣の佐波熊谷等より  
勢を合せて四万余人多と良濱史東より合戦志  
しより徳一より大友此三將是を見りて款合戦  
と志しより一より款合戦と我んより此方より  
進みし勝負と改せんやと多し三万七千の勢次  
二系に分け豊後勢一万餘人有りしと戸次監  
連旧將監速吉弘監理各五千餘人先三系

分ちて先子に進む自陣の勢と豊後勢筑前  
筑後士共六人都合其勢二万二系衆人と腹  
備たり各一手切し薨死ありし物此身の勝負と  
せし九国中必分目の合戦ありし八徳病の者を  
恥しめ戒免し既し合戦始りあり款合戦方  
八九万の圍鉄炮此音天地成響りせり西陣入  
ちて我し程より多と良濱の東西より双方の  
死人算戦乱せり如く申す少と吉川小早川  
天下に譽れ取る所なり大友方より  
戸次旧將吉弘九国に名を得し一人とされし



牛角の我ひみくいつ勝負者一と是  
きりくぬ処よ戸次丹後守濫連と違兵五千  
解人吹引率一葉内若を先立ちく隆京の  
たり備長尾と云所の陣より一趣里決炮  
八百挺一夜よ放ち掛せり又込勢く放つる流し  
敵色ぬぬ流し所決濫連志先よ馬を棄出し  
敵の中より入西もよくは能横し突く迫るは  
五千解の兵とも鏖先吹揚て突蕞以中國京  
と清水邊辺兜玉内藤波多野福原四千解人  
扱くきりくぬお蕞を先進て突吹先進と我ひる

且濫連の勢も突きよ色三町陣引退く大友方  
是より力を持圍吹作く諸子蕞蕞り小進り  
をりや中國方真色し成ぬと見所小治景大音  
声と揚り清水邊邊吹助し兜玉波多野を討せ  
か若たし下知せし色これハ飯田榎本入江山益田  
梨羽知東條子蕞草刈等八千余人演表吹筋違  
耳蕞り火吹散して我ひる数刻の強吹流  
を双方癒て毛利勢と立花山一川よりなる大友方  
幸の博多の陣より引解り戸次濫連より小十時  
下野由布掃部助吹始りて我死の士四十解人



毛利家より末永源七郎赤川九良左衛門領子主水  
元栗屋三良左衛門次始より宗徒の兵五十餘人討死  
以純中末永源七郎の群より論議ありて殺しつゝ  
主従十三人皆一所ありて我死せり其子孫の家  
元純の遺文も猶持侍へきり凡此所西度迄大合  
戦ありし久近き世と白首多きを残りしと云

陣之腰

多々良大橋乃東北形家山上小陣北腰と云処  
有是是利尊氏香榎を主出さし此所より暫く陣  
取多々良濱よりためて菊化と戦ひて一と云

傳へきり

吉竹山古城

井野村より有共山上小首塚とて小塚多し此所  
立花氏より薩摩勢と合戦せし所と云

飯盛山古城

金井より村の上より有煤跡有古記屋鋪跡も有  
此宅の跡有飯盛山の北より少なきく平坂る山  
あり陣より尾と云

丸山古城

大澤村の上より有平地二段陣有周より有共



中ノ杉権政連並々墓所有石段多續く  
墳ト以此権連並々城如リ一也川ト有也  
有山を燒北山と云九山とお向一り此西山の間  
と里東紙迫門川内中ノ

草葉古城

若杉を築粟村との間に南山に有杉権政連並  
く出陣ありといふ

鷹鳥居古城

若杉山北西榎木村の上にあり上ノ城址二股有  
高しと云甚峻一絶去若杉山の半と云

城跡より北に若杉山一上於此城を周防公大  
内氏此家臣杉豊後守興行取立居住一  
其後懿平郡杉徳の城より杉弾正忠重並  
同権願連並々續く一無持志をりルり或時秋月  
より此城を攻取天正十四歳七月廿七日島津兵庫  
頭義弘御多郡岩屋の城攻落一高橋印連  
自害せり曰廿八月宝満の藩を攻破り岩屋宝  
満を以秋月穆実丹後一其後立花左近將監  
降系立之き由いひをり一其後立花左近將監  
鏡虎返答も白殿と云御来印攻治り



諸人の子孫成は時々実父紹運率敵下此為工  
我死せり當城ありて紹運執此の一戦仕て其  
後一市談之の儀也敵も岩屋小松ありて宗徒  
の勇士多討せり其死人多あれは立花攻人更  
思ひも多しは新新死よ八代の本陣高津久  
よ里中素海と其地早くとて引取秀吉先子の  
大軍起て下於中少統支義久も先帰國を  
取中告こされは八月廿四日薩下防塔宰府  
の陣次月退く時此高鳥居の陣と近き空城  
ありて去りて秋月方より接く立花押一の為

筑後國の住人星野中務右補吉良合兵民統少補  
吉兼成筆並に新多嶋津と引退ぬ翌廿五日  
の朝立巻防出此高鳥居の城より歩向立花を  
高鳥居の間終り六十竹所ありは己の別陣と  
押寄りて岡次他於城中と持口廣して各防  
あり其上俄と接する陣ありは屏矢倉堅固  
なりは物走先東水と極くせし難き切所なり  
西を大子南と二の丸ありて一町許地ありて竹木  
所く其生ありて防子西より攻上は城の内  
弓矢炮並に防きたり去れは防子事共せし屏



中子竹多り丹軍大支水雷掃部四将新七字是  
善四郎次炮子中里より起り十時傳馬立花  
決意奮闘日三太支地込龍在馬中時伝馬内田固備  
由布大炊助亦獲り攻入候より屢城亦破り  
城申より火放放以星降り皆九周奉騷り示  
滅立花勢より遊程かこふ遊程射伏切御方  
程より脚り者よりあかりりり城忠大將星降り中務  
太浦吉実を搦りより味方と申知りて居りり  
所滅立花決意奮闘をりあき一絶實事候り遊  
のよみて通りり二の絶を實ぬりり吉実奥の

丸より引入候り次漢より十時傳馬の絶りて首を  
取此外星降り民部少輔次は一絶城中此忠去  
一人もあきり討取ありり斤時の男より此絶を案  
崩り城主次始意を首を剣り事毎比敷高  
名之去まは社九月十日秀吉公より黒田孝高  
賜依法書此軍切漢云々立花統虎此書を  
九名の一物と云稱り玉ひき遊

長者原古戦場

此所は長者の鞍掛松云々九圍評成大本  
有りり定宝此末倒りり今云々其上より小



此所有此邊の圃の字を以所の陣と云貞治元  
年九月廿三日探題斯波佐京太史の子松王丸等  
十一歳少成り少次大將あり太宰小貳舎身筑  
後決断日新左衛門宗像大宮司松浦一黨約合七  
千余人して此所に馳向ひ道次應召藁地より來  
數次待無う日廿七日藁地産決断五十余人を  
二、三少し長者系に押寄て殺ひしり少藁地方  
岩路麻子本將監下田常力以下宗徒の勇士三百  
餘人討是産決断も三所追底残さるるに宮方の  
軍勢已に十作所引退まらる少負ぬと見ん

此處に城越前守五百余人を引率して入替り  
殺ひしり少小貳筑後決断日新左衛門二人を  
一所より討是ぬ其年松浦宗像大宮司より一族悉  
盡四百餘人討是ぬ探題小貳二夜目の軍小少  
負り皆散り成り少り 此軍此事太平記此時  
三十八卷に出たり  
松王丸の陣少し處を以所の陣と云あり又長者  
原の邊古墳多し皆石被ふて石次蓋とせり

上山田村古城

邑と里西乃山上に有陣立不詳

下山田村古城



村より西の山上は有り立花城を攻め一時の白城  
なりと云是を中園勢立花北城と號し一攻  
大友家より受て一時の支城とす

名 爲 城 址

此城を立花但馬守澄載始り築め立花の  
端城とせり天正十五歳秀乃吉公西征有共年  
此夏筑前国及筑後國の内訌 中原二郡肥前  
の内基肆春父西郡と小早川隆家小治り九  
國の押一とす一五ノ九洲也愛あつた毛利家  
中国勢攻勢あり隆家を助く形を鎮免らる

立花家の如きひとを軍一隆家の城址を築し  
とて秀吉公にりり經營有て要害を定り於  
同十六年二月廿五日城官作の事始有乱世の  
内なれは受作と急か家物多而城大を造と其  
切速小成ぬ隆家と七年此國を治り安中  
公小治りて秀吉公北の政所の見本下犯後  
出の季子金吾秀秋を養子とすて園城邊里  
備後公三系の子退り隠居せり是慶長二歳  
六十三歳卒せり於秀秋お續て西戎飲せり  
是戎後の中納言と号り天正十八年公是長又



年迄十三歳之間父子相獲て尚城此主たり

其内一年秀秋御方より後任御方より其長又年長政公小

此国攻治りり秀秋と使前養他其政免封せしむ

此と此邑政公より黒田忠直つ小川忠助と先年

此を以て此城攻請取らば邑政公其年冬入國

有る此城此住む御方より此城三方より海有一方

丹と山はつき城下の境内狭く久安大寺を

中々の地より此と此とて其父如水公少少取置

翌年より里福島より城攻築ゆは是より依て名

鴻乃城此石壁樓等急崩して福園より城攻

運漕せり名高此城北あり城本丸とて其南より

此と此と此と二の丸と此と此と此と此と此と

今と此と此と其字井の上とて是は隆承の

家臣井上伯耆守居りて其南より堀切

有る此を今ハ宗勝とて是は家臣浦共部宗勝

の居りて此の城地の前成圍とて皆此を其の

室路なり商の居りて此の南の山ありて山

の下よりありて此の町を福島と移さる

所名高町なり松茸村より近き東北山より隆

承の家臣松原下野守宅の跡あり名鴻乃里



第等一の通洛船満てり水成浅行車難敷  
少くて大橋を渡さざる其橋は甚百間余あり  
と云今渡り口と云所則橋添の地あり向ひの  
地原去原北行りも橋の有りし所小石有

裏粕屋郡

御飯の山古城

香推宮志東北洛飯の水北よ亦存山也大友の臣  
一万四弾正う菟子し所と云一殺宗像記追考  
舟入立花瑞城ありと云是と云亦存山也但時小  
依りし城主多る(亦是ハ一概に難治

杉山古戦場

香推宮志西南に有る其間近し尊氏多と  
良濱合戦の前陣所成りし少くや杉山志後  
の方戦場ありと云是 神切皇后熊襲を治打平



以下並に五と云名を列

和白村古戰場

上下五村并多於永祿十年九月八日宗像大官司  
氏貞許斐左馬太夫氏満ら勢此所并歩出と  
近急火放火以立巻の降代奴留湯入道馳  
向て責頼少双方討死の士雜兵并二百余人  
有黄昏不及宗像勢許斐岳次さしと  
引取け色ハ奴留湯志其夜和田小陣取多翌  
九日立花但馬守監載也同為一立巻も公元  
寺一とて帰陣一並依此時奴留湯の宿陣

せ一所成り山や和白此山上小陣とりぬ地

青柳所古城

青柳所志東谷山村志の境に古城有新城と云  
高尾城山より立花氏家臣此居きり一所  
と云又其西に城地有城四方城と云城主許  
也

立花山古城

首を二神山と云何名時上り立巻山と辨也  
也や此山字有南に有於を本城と云最  
高一又井橋山と云平高所一阪許有



以下並に五と云名を列

和白村古戦場

上下五村并多於永祿十年九月八日宗像大宮司  
氏貞許斐左馬太夫氏満り勢此所并歩出と  
近邊城放火以立巻の降代奴留湯入道馳  
向て責頼小双方討死の士難兵并二百余人  
有黄昏不及宗像許斐斐岳城さしと  
引取けまハ奴留湯志其夜和田小陣取多翌  
九月立花但馬守監載也同為一立巻も公元  
者一とて帰陣一多依此時奴留湯の宿陣

せり所成り山や和白此山上小陣とりの地跡

青柳所古城

青柳所志東谷山村空の境

其有新城と云

高紀城山より立花氏家臣此居きり一所

と云又其西に城地有城四方城と云城主許

中より

立花山古城

首を二群山と云何名時上り立巻山と群也  
也や此山家南上有於を奉城と云最  
高一又井橋山と云平あり所一版許有



中瀬の山に水有 其西に有坂松尾と云ふ上の平の所  
山の傍より谷小か

所又六畝有松尾の西に有坂を白岳と云ふ本城の  
西に有其上平坂所一延許有松尾の南ある  
如きく山坂大は少く云ふ大は少く北南成最下  
き山坂小は少く云ふ本城の東に有小山を大  
豆と云ふ亦其東に有く小坂を小山と云ふ都  
七代有近古豊前筑前と云ふ大内家も居せり  
義隆陶全善く為り職せり通海を毛利元就  
且亡されし後と云ふ大友家九州乃探題職賜  
りりきられはと云ふ悉く大友小伝にぬ大内家

滅亡の後と云ふ筑前國孫大友成と云ふ此と記は  
城主立花但馬守監載と云ふ大友左近將監能遊  
より十三代の後胤也其先祖大友貞載此  
城を創築し監載追七世乃居城たり宗麟  
の父義隆と云ふ監載の字成揚り立花の并樓  
岳と云ふ立花監載住次大友家より加勢の為奴  
並湯長門入道融泉大友家より素と云ふ曰所白  
岳も在城せり永禄十年九月宗像氏貞許  
雙龍馬を吏氏満大友より叛り毛利家より取  
寄し此城を責んとて同月五日其城向以



物より立花鑑載に留湯融泉城攻出馬圍  
の原より防戦し<sup>國の原</sup>同年十月廿二日  
立花鑑載と奴留湯入道融泉國士米多比大等  
摩野三河入道降國攻おかし<sup>し</sup>以宗徳郡西  
郷庄より歩出多焼劬く其由来攻尋ふ此所  
耳河津源川難波温科并京名津など云々  
出<sup>し</sup>相攻<sup>む</sup>往々郡士七八人有天文  
志頃迄と大内家の藩下あり<sup>し</sup>大内隆景討  
死<sup>す</sup>洵も亡し元能中國攻伐取由<sup>し</sup>常道ハ  
俗亦も元能の志を通<sup>して</sup>立花鑑載  
其地を奪<sup>り</sup>ん<sup>と</sup>し<sup>て</sup>以年酒<sup>の</sup>上御事<sup>に</sup>及<sup>り</sup>也河  
津源川等も勇士より有<sup>り</sup>此ハ鑑載と防多  
年を經<sup>り</sup>物より今國士多謀<sup>り</sup>河津源  
川と先<sup>と</sup>て大略宗徳氏より屬<sup>は</sup>是<sup>を</sup>宗徳  
も毛利家より屬<sup>せ</sup>一<sup>所</sup>武貞<sup>に</sup>歸<sup>り</sup>收<sup>め</sup>以<sup>て</sup>力  
の士三十六騎河津源川河野石津等も別<sup>に</sup>  
其儘<sup>に</sup>今<sup>も</sup>一<sup>所</sup>先<sup>に</sup>物より此押<sup>し</sup>入<sup>り</sup>立花  
鑑載是<sup>を</sup>攻<sup>め</sup>此方より<sup>も</sup>攻<sup>め</sup>此を<sup>も</sup>攻<sup>め</sup>宗徳の  
自<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>安<sup>ら</sup>く<sup>も</sup>河津源川より<sup>も</sup>軍  
陣<sup>を</sup>築<sup>き</sup>ん<sup>と</sup>同月廿二日西郷より<sup>も</sup>



氏貞是代軍幕之少領也。杉權頭連並  
麻生上総少元重を討つ。西へ小折りて河津  
源川以下を救ふ。是より多賀美地澄忠と  
立花鑑載と一隊。力を合せて立花院内小  
隊向以宗像の兵を討つ。是より多賀美地澄忠と  
彼より遠く伏崎河原に押出。時前後に  
咄と起。岡地揚る。責我。元隆忠一隊討負  
事。自害を宗像氏貞の將とす。是より多賀美地澄忠  
を世に於て立花勢と對津。其頃高橋鑑種秋  
月種美の城強し。豊後勢筑後表引退

ぬと國中沙汰を依折。是より立花如留湯の  
兵力を以て。良もす。是より立花如留湯の  
同廿八日立花如留湯以下敷北。已う城く小  
隊を以て。西へ討つ。是より立花  
西城代を以て。是より立花如留湯の  
是より立花如留湯の。是より立花如留湯の  
宗麟。是より立花如留湯の。是より立花如留湯の  
元統の威勢。傳つ。永禄十一年の春。立花如留湯の  
立九国。是より立花如留湯の。是より立花如留湯の  
是より立花如留湯の。是より立花如留湯の。是より立花如留湯の



九國貨法手不入りん中、以違り、又高橋三河守  
艦種も清左尾張守、以艦列、其を、加勢を乞  
事頻りに、元龍周防長門西国八十余人を  
筑前国立花、指懸、之、既、兵、船、の、艦、を、解  
多、大、友、味、方、此、兵、士、多、比、葦、野、奴、留、湯、乃、は、艦、載  
と、會、合、し、て、軍、の、評、定、を、其、所、不、或、時、多、多、順  
大、葦、野、葦、野、路、邊、以、艦、載、志、あ、く、呼、迎、し、五、人  
何、の、心、も、亦、く、艦、載、し、居、陣、西、樓、岳、よ、來、る、を、兵、使  
一、座、二、人、お、り、歩、果、以、良、時、し、奴、留、湯、長、門、入  
道、り、居、陣、白、岳、押、多、所、融、泉、只、ひ、も、勿、け、ぬ、事、あ、れ、  
我、負、く、漸、進、是、上、筑、後、園、子、能、り、大、友、氏、族、の、令  
且、始、終、彼、語、り、あ、る、も、い、ふ、小、艦、載、を、大、友、の、背、肉  
成、し、且、只、ひ、け、ぬ、事、や、と、考、究、し、所、し、同、四、月、六、日  
中、国、背、野、邊、渡、海、し、て、立、花、且、善、陣、志、と、之、の、事、六  
豊、後、幣、戸、次、丹、後、守、艦、連、旧、將、越、中、守、艦、連、吉、弘  
危、近、太、史、艦、理、筑、前、兵、士、數、向、し、同、廿、四、日、よ、り、  
立、花、北、樓、攻、取、城、内、且、立、花、艦、載、同、兵、任、人  
安、部、民、部、葦、原、田、裁、前、守、艦、轉、り、五、男、原、田、下、流、守  
親、種、も、此、間、中、兵、士、數、し、て、あ、り、し、り、艦、載、孫、五、小  
竹、中、兵、士、り、加、勢、よ、こ、り、れ、希、志、八、清、水、危、近、と、同、船



一々立花退去りしに援兵楠篁於中國の  
大將を清水左近將監高橋鑑程ら衆は清水左  
尾張守波是一万衆人鬼命狀控て防寄手  
三万作人衆は先達に殺害せしむ歌味防此死人  
岩谷も謀心斗ふ能見人女を於海小鑑載ら衆  
人下野田左衛門右史と云者有立電重急此者此七  
鑑載程是利と只ひりり衆手此將戸次鑑連  
其利是利欲し欲し里社辱状願人兵軍半は  
鑑連ら勢強城中し引入忽反逆し衆是は防是  
所の城兵衆と矢ひ散らし小居行安民民部並

と奈田主水正幸小生捕是ら里原田清水清水  
も人数若干討せしむ名爲の小城をさしし引  
入る日己は夕陽なり及し四時吉弘も戸次  
鑑連也一ツ子成るく多勢城中小込入り是ハ鑑  
親主從十作人城次紛出婦女子此城小落下  
里智く是を依り夜明あらば原田清水以下二  
一ツ子成一方次歩破る中園は破る中をて中意  
代達せんと客は敗軍の士と集りれども是  
指し兵も集り此城をて切を立人事難叶  
款の志しぬ先は中川凌の方人落人とは婦也二



の博を出る事代さうしてあせ行延の野田富の  
左史を向うしてあせ人鑑連小部と若きうられ  
鑑連取物り多敷に八千餘人の博りて臨を慕  
少く遊無足絲皮を物揚うりて鑑載是欲  
見く慈よ歌よのけ命生捕まてと惜也  
少く道とまかす小赤より松の一村有山中  
やう居鑑載大吉声を擧げて野田小出後  
是も果は後十文字小捨切延は刀山と咬指  
通一立は久んぞぞ死ふあ十餘人の士

後ま〜と腹切其中小今人差人有あは  
陸上其女と下篇片う走ハ歌も見教は一  
多命を全しせよと云われは彼今人洞をば  
らく〜と流一云の芳志をも高きと極  
人此常之況家君の縁を食んで年久〜何  
志西月有て命生て二後人よ仕〜人や少  
自首を捨落して死よあ鑑載の首を  
宗麟も見せや〜とて田原太郎次郎と先  
流て豊後よ送り扱立死の極よと降留原掃  
部那田村進士吉清田北民部丞次藤並戸次



鑑連と野田と陳と取回拵鑑連と小竹吉弘  
鑑理と青柳と陣次張と秋月高橋と吉  
すの國土を討んとは知る不同年の秋八月  
高橋と家光清茂尾張守を去夏立花よて  
同死同生の誓ひをせしと鑑載を控へ近  
きりと皆人識り少少毎念骨髄を通り原  
田親徳清水左を拵と拵一命て及毎二  
の合戦し立花次攻落し先自此恥知事人  
敗軍の士卒を集め三將一自小踏以同二日  
の刻立花表へ歩出ぬ立花の城代四将田北麿

原の方より敵出張より由急と告るは野田  
より戸次鑑連小竹より野田親徳青柳より  
吉弘の南押と敵と立花山上登せしと叶し  
ましとて城と敵との回取取切て陣より人を  
繰入る敵を拵拵しとて敵ひたり原田清水  
清茂より勢戸次鑑連より陣小押葛里と毎二毎三  
と葛里と人よりす鑑連より大勝を志中取巻  
事ありとて戦しより原田清水清茂と後  
あり敵圍化して追慕れ今と追急ぬ起事  
とて味方を一命討死す有と命を惜み



北のいよく、葛城、瀬連の一番備小野、彈、柳、楓、  
空引、多、濃、五、六、二、番、上、由、布、美、他、馬、入、等、と、く、  
三、女、今、り、四、女、今、り、散、と、小、攻、合、等、と、以、て、三、陳、上、  
由、法、取、後、直、年、人、依、今、り、を、子、を、掃、く、競、ひ、無、  
て、お、我、上、此、手、も、我、勝、て、周、際、長、四、番、堀、等、無、  
守、又、昔、安、東、周、防、守、六、番、高、野、大、膳、元、入、等、り、  
く、攻、我、一、七、清、及、尾、張、守、も、討、死、く、中、国、勢、も、  
原、田、高、橋、勢、も、殊、り、少、く、あ、り、討、た、る、と、是、を、清、水、  
左、近、主、北、次、さ、し、て、葛、城、新、文、北、濃、上、等、主、從、十、  
餘、人、小、舟、も、亦、乘、り、長、門、の、地、上、押、込、於、原、田、下、  
籠、守、親、種、と、と、て、も、逆、を、如、所、と、思、ひ、希、と、は、居、  
人、と、は、さ、り、死、死、及、お、り、馬、も、討、殺、さ、れ、去、立、り、女、背、も、  
亦、落、さ、る、と、て、大、童、小、成、喚、き、呼、ん、て、我、ひ、り、り、高、  
等、も、是、を、少、し、討、た、る、れ、親、種、も、討、た、る、  
又、一、方、官、萩、原、又、庄、清、深、川、十、筋、一、先、落、出、ひ、て、  
等、と、中、意、次、逆、と、し、と、敵、是、馬、此、有、り、海、上、引、等、  
て、亦、今、世、一、方、を、亦、破、て、西、次、さ、し、て、引、退、者、也、  
永、祿、十、二、年、四、月、中、旬、毛利、元、就、等、親、芳、等、  
宝、満、の、高、橋、澄、種、次、救、り、人、と、て、安、藤、周、防、長、  
門、石、見、北、勢、四、万、衆、人、を、引、率、り、豊、前、国、上、



後平治の事海老名を攻之——日月廿四日吉川  
元春小早川隆宗を大敗す——て豊前國より  
筑前國小早入を和筑前守と大友幕下の國  
士又と豊後の士大敗す——の陣小早入といふも  
中國の大勢を見終——と一戦も及らぬ陣を  
明も筑後路き——て引退を立花此陣中を露  
原田北四将の三が敵を討とる——と進不山平小人  
粒と下——海邊を指 死す——と人々を利  
の先陣入に定戸 惣玉市川依世福永等一  
万軍人圍成陣り 憂嘆死陣人々を攻殺ひと海老  
叶り終——と急く陣へ引揚りたり 斯て中平  
勢立花の陣中を尺寸此地も奪きん 取巻とる  
去れぬ陣中能持とる——て落す或時城中を  
五月雨且吐物具も徴しりんととひ中り 笈止  
ゆと書る——一首の狂歌次文よ書を寄すの  
方一也送る——市川中國陣中を返——ふ如て落  
城の歎きおりの面とて痛り——とと書る  
送る次を以皆部拙考れハ名上記ス其後  
城中水も渴——久安雨も降らざる人馬亦  
難及し及し中國勢全境をく集て居るを



解多地岩一水の手をもりきり一原は  
原田北中知して白草一尺散入山梯の  
言不めて馬鉄あゆむ引出湯洗の志似か  
とくしてんをみ家は是立別所の丸小水有と  
飲よ見かん為の深きう去是是水あられハ飯  
かーをまきあふは塩ふと菓を袋より入岩根の  
隠重有和よ埋並取上りて食すなめと  
塩とくハ高き山城をれハ水あり一草亦小座  
落込あめあうと一帯家かうと進ハ勇力も是と  
飲と湯登記せうあ一飲小居あかう首と是是

よ星少も力の有肉一飲よ進く死人事社武  
士の中忘られと云案も有り去宗麟ハ此中  
中入んく吉田油古を播と云出ハの上中を彼  
とくして此中入る是ハ宗麟はあふふ子細有  
早く降系て此中令せうハ此古を劇又飲  
中と出ハ陣中一隊り其申故告友人の陣代是  
と出多其意よ任せ吉川小早川は降系是元格  
の命よて浦多部権能光あ人を依掃部民部  
降系此兵忠く宗麟の陣一送るを所と飲同  
年此十月十四日豊前園小倉より元格降飲



筑前守一立花此城は押入其外之り  
取中知世と云是は大友家より中国の  
為主張伺ひ大内此一家は内本家  
子置在富の表取と云者有り  
人の軍勢を並せり此山は小岳多  
此と云り此故尾子睦久は山中麻  
我起一尾子の民族伴与出重必  
有者此知中国の斯次鎮人  
雖も此傳は跡に可守或と元春  
會及せし是事れは雖も可守或と元春

其時其人云り是れは  
と里可持家既方と云一門の端  
跡に可守物と有る是れ非  
時未だ可守大勢の諸士を  
奪の詮候有るは或一人  
拙者も板田新五郎と云  
其今度其の故退は跡の  
拙志跡の故用も是れ可  
事も板田及是れ其意有  
さし可守と感一あり

此時中西士六一日の内五七度  
其會す是れ其の詮候は







筑後國高良山小倉有者のむら松本出立花の城小  
去年毛利方とて押進を坂田新五郎浦  
兵部丞桂光處尉攻とて戸次丹後守鑑連  
四将敵中守鑑連吉弘左近大吏鑑理以下の諸  
將出立花邊より折向て其勢二万余人立花の城  
攻取出立花を籠り一砲を遣り人多く降なく  
仕多かり城中の者も攻り折合なく命も  
不勝殺し多かり去るも城と無勢ありて志りも  
後詰の程かゝり勢多かり味方の必り是  
を決死し勢多かりなり勢多かり一日も城難く

是より折り戸次四将吉弘此三より彼を立  
城中心よりされたりい當城攻落はしき事業  
せり後より安しされとも大友屋形貴方より射し  
多何のまねかゝり城を明けして士卒の命次  
助り於しきや否と申遣り者進て坂田挂浦を  
始士卒皆龜島洞奥此只ひとるゝ者折  
りり多しは一我仕事向を志りしとて城を明て  
折退り者敵大友方より至る人變あり其上  
警出りて軍兵攻掛長門の地（是より折り  
是より去年四将田北陣多かり路系しり向を豊



後(遠)を以て其(其)強(強)と(と)作(作)軍(軍)一(一)期(期)多(多)  
宗(宗)麟(麟)を(を)豊(豊)前(前)支(支)統(統)の(の)仕(仕)番(番)事(事)終(終)る(る)軍(軍)功(功)の  
淺(淺)深(深)を(を)依(依)て(て)思(思)費(費)行(行)の(の)進(進)高(高)良(良)山(山)を(を)其(其)府(府)  
平(平)瑞(瑞)陣(陣)一(一)高(高)壽(壽)の(の)城(城)へ(へ)入(入)ら(ら)ま(ま)る(る)海(海)國(國)を(を)  
其(其)所(所)の(の)旗(旗)中(中)の(の)士(士)皆(皆)く(く)一(一)府(府)内(内)は(は)系(系)復(復)以(以)天(天)文(文)策(策)  
中(中)國(國)の(の)毛(毛)利(利)敵(敵)を(を)か(か)し(し)其(其)中(中)竟(竟)造(造)寺(寺)隆(隆)信(信)秋  
月(月)高(高)橋(橋)等(等)の(の)請(請)け(け)乳(乳)を(を)か(か)し(し)とい(とい)ふ(ふ)も(も)宗(宗)麟(麟)の  
武(武)威(威)を(を)以(以)今(今)年(年)此(此)ま(ま)と(と)る(る)九(九)國(國)の(の)内(内)治(治)を(を)以(以)  
袋(袋)舟(舟)入(入)太(太)刀(刀)以(以)運(運)ぶ(ぶ)收(收)む(む)萬(萬)分(分)國(國)を(を)知(知)る(る)大(大)変(変)の  
城(城)を(を)れ(れ)ば(ば)毎(毎)々(々)是(是)の(の)人(人)を(を)指(指)出(出)て(て)お(お)か(か)す(す)事(事)を(を)

戸(戸)次(次)丹(丹)後(後)守(守)鑑(鑑)連(連)を(を)武(武)勇(勇)々(々)智(智)古(古)人(人)次(次)秘(秘)以(以)爲(爲)  
其(其)所(所)より(より)あ(あ)れ(れ)は(は)立(立)花(花)北(北)城(城)主(主)也(也)と(と)り(り)て(て)元(元)龜(龜)二(二)年(年)  
豊(豊)後(後)国(国)赤(赤)司(司)村(村)友(友)北(北)鑑(鑑)う(う)嶽(嶽)より(より)立(立)花(花)の(の)城(城)に(に)  
移(移)る(る)事(事)を(を)鑑(鑑)連(連)を(を)今(今)年(年)五(五)十(十)七(七)歳(歳)に(に)判(判)發(發)  
し(し)て(て)道(道)智(智)少(少)將(將)以(以)九(九)州(州)中(中)國(國)に(に)任(任)じ(じ)ら(ら)る(る)勇(勇)  
者(者)也(也)なり(り)し(し)を(を)於(於)人(人)なり(り)天(天)正(正)十(十)一(一)年(年)八(八)月(月)十(十)八(八)日(日)  
岩(岩)屋(屋)の(の)城(城)主(主)高(高)橋(橋)紹(紹)運(運)の(の)嫡(嫡)子(子)元(元)近(近)將(將)監(監)統(統)虎(虎)  
次(次)鑑(鑑)連(連)に(に)任(任)じ(じ)ら(ら)る(る)事(事)を(を)以(以)て(て)立(立)花(花)に(に)を(を)り(り)し(し)家(家)  
紹(紹)運(運)より(より)瀬(瀬)戸(戸)に(に)十(十)兵(兵)衛(衛)と(と)云(云)者(者)一(一)人(人)に(に)付(付)し(し)て(て)立(立)花(花)  
に(に)送(送)り(り)其(其)中(中)に(に)一(一)人(人)も(も)付(付)し(し)て(て)去(去)年(年)



十月六日紹運繼連と將徳波郡に於て秋  
月、勢を裁つて首級七百餘を取此と記統虎  
十六歳ありて初陣を嘗て其勇氣は繼連  
見付あり其頃と里養子ありと云ふ事あり  
天正十三年九月十一日道雪筑後国法井郡  
北野村に於て死去せり行年七十三と記  
去年と里大友家北士大將小加勢の爲此年分  
に筋力衰へ老病に罹りて死去せり  
立花の城に近將監統虎と記十時松津守  
次使ありて道雪に死骸送立花に持來りて

中告るるに紹運も立花勢も筑前より  
逐次進軍不定り而して是代迄て高良山に陣の  
勢も勝つて黒木城に入りて引入るる間共四日紹運  
希道雪家人北野村に於て立花に及ぶ事ありて  
地をれは用心ありて一とて鷹野三河守十時松  
津守小野和泉守等先陣とて道雪に及ぶ  
中小立とて紹運を敵せり是より路次敵化あり  
肥前中津造寺隆任不意に有馬より討て  
中津の路に敵ありて筑後の國に於ては  
少くとも此合敵を以て遠中一とて紹運に



岩屋の城は合はれ道言に死骸立死に其後  
立花山の下養老院に葬られ今に傳承不替  
有道雪之主人とあり智勇有若年と云  
其取と云はれと破り強きを振ると向し所成  
うきと云はれなり天文此未と云天文正年  
其動海近表名次九別と振り志と如く  
忠義力有て宗麟の武徳次と云始次二  
公かく後事せり且士卒と云るけ人の和を  
キリむかへ胆後の東北氏宮方小毎二の忠  
節成一勵し若く是れ亡と云後近代徳業

松のくま小島と云るも紹運道雪の五將  
智勇忠義成陣と云るなり天文十四年七月  
嵩津野岩屋の城は攻められ城主高橋紹運  
自害せり云るハ廿八日早且と云宝満の城に  
取掛處兼と云る有智山在陣の勢と合はれ三  
万人成二小分一子と云道平松尾坂と云攻上り  
一子と云是れ取成宗成と云講堂の南に尾  
と云競ひと云城中一城成と云岩屋落城せり  
と云宝満の城早し明後すと云入るは城中  
小勢なりと云岩屋落城をまの所と云るを







然し亦是素君此在余且代りては流泉最久の  
全身儀之也あまやうも是と云或は統虎  
害有る人とは是耶亦多し其武士と生死の事と  
拍りては夫を捨いて鴻侍と信せしへま  
脱し結運我死し以て後寫傳し傳系あは  
余は惜て忠孝此道成志しぬ士なりと九國の  
者其美の事と為定なるも素於背成りて  
防戦の事作自交ぬ事と作も有る其内  
秀吉公此信先勢北来也後誥の勢を待た  
るは運成可用其月居傳せは君信有運成

極と云るも一理有是は  
雖於是之類も亦極せりと云ひあはる所は統虎  
中されたりと汝等も珍貴謂多し勇士の義  
也先と信傳系此美公ひもあはる余惜しと思  
ひ人率を多く落去毎しおも恨み日比の  
君信此弱快遠しと思ひ人士の籠縛也と  
有あ是は誰か二代の君忠成志して居行し  
一同し余亦しと拍をあは統虎と云或方一の  
返答も亦素度関白殿と云流泉中成贈りて  
人し成は結し結運事殿下の為し岩谷亦於



設首害以同當北より延運孝順の爲一殺せし其  
其後お設下中早く軍勢を此地へ至新若向望  
中遺部征さるは籠城の用意せよとて岩屋  
切立屏櫓状修理して設所くの子令一歎  
今や易難と侍りけり去程小島津勢大寄府  
所より粉屋郡へ押出依款方も皆力岩屋室  
満支障よそ宗徒の勇士多く討せ軍兵若平  
亡ひ多負も多うと有り陣中立花と之宛て其の  
要害成上給ふ所の士卒も岩屋室に至る所  
へ一極責落し難くとも只ひ人急よ不攻

して遠より原且陣屋次々少城中悉く焼拂  
ひ裸城よか其所く小押へを在陣取圍先  
多時く是程を部して遠方より銃炮を射無  
依計よて流し日をと送り其於抄又秋月種實  
と岩屋室居陣の上之法笠郡次少月室儀  
次居居陣も定先岩屋室も人数を募り近新郡  
高島居の城を大内時代小杉重並同連並  
無持して有り近年空城成次取搦一立  
荒押への為筑後国任人星野中勢太補吉実  
同民部少補次等麓並々依去程不秀吉公の



先勝吉川駿河守元基小早川元盛佐隆景黒  
田勘兵衛由孝高教万此大軍次引率して豊州  
小倉上陸取の空守之——うら高津方より早  
軍勢下引取遣ひし——うら高津方より早  
稻屋郡立花一勢せしる軍兵凡筑前小早川の  
薩摩藩上八月中旬旬意を引退し其後統虎  
杉之居浦城より八月十九日高鳥居の城を理長  
せ良時より攻め居——城主早野吉実全才民部吉兼  
之部士率一勢より城を攻め居——引退をせし  
流系孝高より引進せしる考吉公流感斜を

次立花事、自分の陣持てて——之希有子物  
兼子早之高鳥居の陣と兼取城主兄弟以下討  
取——是毎比類働九州の一物之と流磨美有流  
感書流孝高小封——流りりり流は感書里田名がしを自  
文意多れに兼て取中世に流りりり流の軍を以て流り  
再下知世に——是是文意の類類なるに流りりり流の軍を以て流り  
如中流りりり流の軍を以て流りりり流の軍を以て流り  
西征して九国城を征へ諸士を賞を行はせしむる時  
因て小早川系を賜り其上小早川内二郡流後の  
内二郡と加（流）——入国あり流系と名鶴の城  
城築て居住せし流系を公ひ出さく立花の



城と云浦兵部宗勝城傳代とて入趣進り家  
邑政公入園の後破山の所立花に村を傳有じ  
時の士宅也大門と云新立花口村の入口あり  
是大子の門あり一新一中系村の方中門  
と云和有り是搦手山や凡此傳を要害無双  
の名傳如くあり立花山の南北方立花山下  
續を山次鑑稱傳と云其下此谷も戰場也

團原古戰場

城内に東に在り其境内あり摸拾五町許  
廿四五町許有廣原之東に宗像郡西郷に

境也昔此所小園在道乃監宗時と云地士  
居住一宗像郡の東にあり其印近に次次  
者家々厚聖村よ居たり一丹波或郡少補  
峯延と志をく合戦以宗時終よ歩負て  
峯延は降於園氏に居たり一其所の園  
の志と云園宗時を録今も立花氏少仕  
多中園小在亦永祿十年九月宗像氏  
貞評變を馬太史氏傳大友一味の志を慶  
祿報成企と云宗時を信以是と去月  
大友に信從よ慈と云高橋三河守鑑稱を



攻んとて太宰府の勢をふかりて其在後  
毛利元就の語に違申西勢海海世は居據  
茂明とてその有る人其前も漏りて防敵此  
用意す人として修之宗像と改り其意彰て  
宗像許斐とて人数次揚(同又日立花此端と  
致向とて此據とて大友宗麟より立花但馬守  
鑑載奴五湯入道次入並進)とて此中を以  
何れに欲て居るより侍人長吏略の是よりさゆり  
似たりとて陣ふと告り此兵を並西城代多勢を率  
立花山次守備鑑載を席内の系と陣を張ぬ如  
湯融泉を衣とて山陣取多宗像許斐と對陣  
以五陣初之是程也一銃砲軍次仕を以て後去  
敵味方入乱とて殺ひたり宗像許斐亦歩退て東を  
うて引退せ立花如多湯の勢勝小宗とて退る  
より敵味方日以兵小知志とて山中を以て海の  
哨候や和たりとて宗像士占部大和神屋石松を  
是とて二百余人取て退一競然此敵次進  
退希氏貞の語より其希字此據より引入希字是候  
圖此原合致少なり







